

教養教育としての英語総合演習（時事英語）

吉川 真理子

Mariko YOSHIKAWA

1. はじめに

大阪経済法科大学では、2003年度大幅なカリキュラム改革を導入した。その結果、それまでの一般外国語学習カリキュラム¹⁾であった「英語」及び「第二外国語」（ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語・ロシア語のうち1言語選択）必修システムを変更し、学生は、全ての外国語の中から一言語を選択し学習することが必修となった。この変更を受け、それぞれの外国語は上級科目を充実させるべく2004年度より新たな科目を開講した。

本学一般外国語英語教育は、「視聴覚英語」と「英語表現」の2科目から成り立っている。学生は、ネイティブスピーカー教員指導のもと「視聴覚英語」で、「話す・聞く」のオーラルコミュニケーション能力を身に付け、「英語表現」では、「読む・書く」というリテラシー能力を養う。これら2科目を修了し、より高いレベルの英語を学習したい学生のために「英語会話」が開講されていたが、2004年度から、さらに高度な「英語総合演習」を開講することとなった。この科目は、中級以上の英語レベルを持ち合わせた学生や、英語圏への留学を終え帰国した学生に適した科目とされている。

本稿では、筆者が担当する「英語総合演習」（時事英語）を開講し、半期を経過したところで、本学での英語教育及び教養教育としての「時事英語教育」について考察する。

2. 時事英語教育の意義

2. 1. 情報把握・情報活用能力の涵養：情報アクセスの観点から

夥しい情報が時空を超え溢れる今日、英語によるメディアは今までも増して重要な役割を果たしている。BBC や CNN などの世界規模のメディアネットワークによる24時間放送や、動画、音声が同時に入ってくるインターネットニュース、それにインターネットを媒介とした閲覧可能な様々な新聞や雑誌が従来の情報形態に加わり、今や瞬時にして膨大な量と種類の情報取得が可能となった。

これらの情報の多くは、現在世界で共通語とされている英語を媒体として流され、その膨大な情報の社会的意味・影響力を鑑みる時、学生が時事英語を学ぶことは、個人の情報へのアクセス能力を高める上で極めて重要で意義の大きなものと考えられる。

2. 2. 英語教育の観点から

時事英語に触れることにより、学生はメディア特有の表現や語法など、既習の英語表現には含まれなかった新たな表現に接することが出来る。特に時事英語には、動詞と前置詞の結びついたフレーザルバーブや、文化的・社会的背景の理解を必要とするイディオムなども多く含まれ、学生は、より幅広い英語能力が培うことができる。

また、学生は、ニュースで頻繁に使用される高いレベルの語彙の習得や、世界の様々なところで使われる口語表現など、異なったスタイルの、言わば、多種多様な英語を学びとることができる。時事英語の学習は、TOEIC・英検・国連英検等の英語能力検定試験の受験対策にも不可欠といえといえる。

2. 3. 教養教育の観点から

時事英語を学ぶことにより学生は、今日、国内及び世界で起こっている事象に目を向ける機会をより豊富に持つ事ができる。様々な記事を通して世界の大きな流れを察知し、また、その問題がなぜ生じたのか等、個々の事象に対する歴史的・社会的背景を学ぶことは、学生の現代社会に対する理解を深めると同

時に、彼らの知的探索心を多いに刺激することにもつながる。

また、同一事象に対する諸外国メディアと国内メディアの報道における焦点の違いや、微妙な表現の差異を読み取るなかで、なぜそのような相違が生じるのか、また、それぞれの国の政治・経済・社会・歴史的背景等がメディアに与える影響を学生自身が気付き考える契機となる。このような思考行動を養うことにより学生は、自らの身近なメディア情報のみで事象の性格を判断することの危険さ、また情報自体の信頼性を懐疑してみる‘批評的思考能力’（critical thinking skills）（Smith: 2003）を育むことができる。

さらに、諸外国で報道される日本の情報に触れることにより、外国における日本の評価を知る機会を持つと同時に、その評価を客観的に受け止めながら分析する力も養うことが可能となる。

このような観点から、時事英語教育は単に英語教育に止まらず、日本社会を含む世界の多様な視点を英語という言語を用いて学ぶことができる科目である。従って時事英語教育は学生がよりグローバルな視野を持った人格形成を行う上で、極めて重要な教養教育の一環となり得る科目であると考えられる。

3. 時事英語教育の内容

3. 1. シラバス

海外で放送されているニュース（ラジオ・新聞等）や雑誌に掲載された記事等を教材とし、英語のスキルアップを図ることを目的とした授業であることを述べ、2004年度授業要綱には以下の内容を言及する。

リスニングやリーディングの強化のみに止まらず、英語でのディスカッションも加え、英語を用いての表現能力の向上も狙う。また、海外で日本という国がどのように捉えられているのか、視点を日本の外において客観的に日本を見つめる訓練も兼ねている。授業で配布される英字新聞・雑誌を読んだり、ニュースを聞いたりしながら内容理解を行っていく。本演習は、チャレンジ精神があり自らの英語力をより高めたいと感じている学生、若しくは、留学から戻って英語のレベルを持続させたい学生

に向いている。

3. 2. 授業内容

授業の内容は、主として2つの構成で成り立っている。まず、授業の前半は、それぞれの学生が、前週の授業からの一週間にメディアで報道されたニュース項目を一つ選び、英語で発表する。これは、毎週の課題とした²⁾。この際、学生は、どの分野のニュースを選んでよいこととされた。それぞれの学生が発表した後に、そのトピックについての質疑応答が持たれた。

次に、英語を使用して報道されたニュースを聞いたり読んだりして、その内容理解を行う。学生が、その報道についての背景知識を養うことを目的に、この活動の最初の段階で、そのトピックについて短時間の話し合いを持ち（Pre-listening/reading activity）、内容理解の補助とする。また、このPre-listening/reading activity は、内容を理解した後のディスカッションにも大きな役割を果たすことから、問題を提起する形でオープンエンドとする。

授業では、報道対象である事象を国内外で起こった一つの無機的な出来事、すなわち「点」として捉えることなく、むしろ過去から現在に続く「継続した歴史」として把握し、その事象が起こった背景や原因、また日本社会や世界に及ぼす影響などについても考察を進める。

3. 3. 使用教材

教材とする報道は、学生にとって親しみのあるトピックや、随事、メディアで広く取り上げられた報告等、彼らにとって、より興味深いものを選ぶように努める。

リスニング教材は、学生の聴解能力を考慮し、英語学習教材として開発されたものを採用する。具体的には、実際に報道されたBBC ラジオニュースの内容をそのままに、発話速度を落としたもの、また、アメリカの国営ラジオ放送（VOA）が、英語を母国語としないリスナーのために、難度を下げた表現で放送しているニュース番組等、時事英語教材のリスニング用に開発されたものである。しかし、その内容は決して平易な物ではなく、学生のもつ英語能力を

適度に超えるレベルであり、彼らの英語力の更なる向上に適した教材である (Krashen: 1985) と考えられる。また、リーディング教材も、リスニング教材同様、時事英語学習用に開発された教材や英字雑誌を使用した。この他に、英語で書かれた日本に関連する記事をインターネット上のニュースメディアから選び教材とした。

4. 春学期を終えて：その成果と展望

4. 1. 春学期の成果

語学面での向上、特に学生による外国語習得能力の自己開発について述べる。学生が、語学習得のための効果的な学習や、その成功に不可欠な機能の一つとされている学習ストラテジー (*learning strategies*) (Oxford: 1990, Oxford & Crookall: 1989) を発達させたことは、大きな成果として挙げられる。ここで言う学習ストラテジーとは、主に認知ストラテジー³⁾ (*cognitive strategies*) と呼ばれるものを指す。このストラテジーにより、学生は多数の未修得単語・表現が連続するテキストから、(1)キーワードとなる語をもとにテキスト内にある関連語句を見つけ出し、その意味を推定することにより内容を把握しようとする姿勢、(2)テキストから得た情報を既存の概念と関連付け、それらを内容理解の手段とし活用する能力、(3)新たに得た情報をもとに、未知なる情報を想見する過程で、テキスト内容の結果／結論を推察する姿勢等、英語学習に能動的に関わる習慣を形成し始めた。すなわち、学生は、既存の知識、その知識に基づく自らの推理、そして文脈内のテキストから把握した情報を有機的に関連付け、全体を理解する方策 (*holistic approach*) (Arnold: 2004) を学び始めたのである。これにより学生の英語受容能力⁴⁾に向上が認められた。

また、3. 2. に記された「ニュース報告」という課題を各学生が毎週持ち寄り発表することは、学習者中心 (*learner-centered language teaching*) (Nunan: 1988, Lee & VanPatten: 1995) の学習環境を整えるうえで非常に効果的な役割を果たしたと言える。学生が自分の経験・意見をクラスに持ち込み、それを他の学生と共有することを可能にするこの経験は、学生自身が自らの語

学学習態度を積極的なものとして管理する（Lagutke & Thomas: 1991）姿勢を育んだ。はじめは、発表者に注意を払うことが少なかった学生も、発表を続けて行くなかで、徐々に学生同士の意見交換も行われるようになり、他の学生から学ぼうとする姿勢（Rendo: 1995）も育った。

その他、学生がメディア報道に目を向ける態度をつけ始めたことも成果として挙げられる。授業開始当初、学生の多くが、新聞・雑誌・テレビ・インターネットを含む様々な媒体を通じた報道に接する機会が、皆無、若しくは、非常に希薄であるとしていた。しかし「ニュース報告」を毎週の課題とすることにより、様々なメディアソースに対し、より積極的に接する姿勢が生まれつつある。また、この課題は、学生がそれまで留意しなかった報道項目を認識する機会を与える一助となった。学生の発表は、週を追うごとに社会・環境・政治・経済・国際・スポーツと多岐に亘り、彼らの社会事象に関する興味の高まりを垣間見ることが出来た。

また、同一事象に対する諸外国の報道を含めた複数のメディアの報道内容を比較し、各メディアやその社会の視点の相違に着目したり、その相違が何に起因するものかを考察する機会を持ったことは、'批判的思考態度'を身につけるうえで学生にとって大切な経験であったと言える。

4. 2. 今後の展望

まず、学生間の英語能力格差が甚だしい状況であったことから、開講後、授業内容を変更せざるを得なかったことが挙げられる。その能力差は、時事英語の学習に耐えうる英語力が備わっている学生から、基礎的なものに留まった状態である学生と、思いのほか大きかった。その結果、予定していた授業のほとんどを英語で行うという授業形態が不可能となり、授業は日本語を併用する形となった。この科目が本年度から始まったことや、日常会話で用いる英語と著しく異なる時事英語の言語レベルに対する認識が浅かったことがあげられる。次年度に向け検討する必要がある。

また、この演習は、「読解能力」・「聴解能力」の向上を基幹とし、その上に「会話能力」の発展を学習の主なねらいとしたが、春学期においては、「読むこ

と」を中心に授業が進められた。これは、学生が「読解教材」の読み取りにかなりの時間を要したためである。1つの教材に平均2コマ（上記3.2で記された他の活動を含む）の授業時間を費やした。今後は、他の2つのスキル向上のために時間を有効的に使う工夫を必要とする。

教材については、「読解能力」・「聴解能力」とともに、時事英語教育の教材として開発されたもの以外、すなわち直接メディアソースから引用・活用した情報は、学生にとって難易度が高く、春学期の段階では語学教育の観点から適切ではないと判断された。しかし、「時事英語教材」の内容は、当然「情報」としての新鮮さに欠けるものであり、授業の目的のひとつである、様々なメディアソースからの生きた情報入手・活用能力の開発という観点からは、その目標に到達するには至らなかった。

この他、学生による「ニュース報告」は、引き続き今後も行う予定であるが、その発表方法には工夫が必要とされる。学生の中には、英語で書かれた記事を自らが消化しきれぬまま「読み聞かせる」という形で発表してしまうケースも見うけられた。そのような場合のほとんどは、発表を聞く他の学生の理解も得られず、発表者の「空回り」で終わってしまうことが多い。今後は、まず、発表する学生自身が報道項目をよく理解した上で、聞く学生が、より理解しやすい平易で、かつ正確な英語を用い発表できるようにする必要がある。

また、この報告を発展させ、発表する事象に対しての自らの意見、その意見を持つに至った思考過程と客観的判断の根拠等も発表に組み込む等、学生の「批評的思考能力」の発達を促すことを目標としたい。

5. おわりに

2004年度春学期より開講された上級英語科目「英語総合演習」（時事英語）について春学期終了段階での成果と展望について考察を行った。

「時事英語」という科目を、「英語教育」と「教養教育」の両面を相補的に担う科目として位置付け授業を行った。今後もそのバランスをうまくとり、この二つの教育がより効果的に行われるよう、創意工夫を進めていきたい。

注 記

- 1) 本学の外国語教育は「一般外国語コース」と「英語圏・中国留学コース」の2種類に分けられる。「英語圏・中国留学コース」を選択しない学生は、全て「一般外国語コース」に入り、それぞれ選択した言語を学ぶ。
- 2) 開講直後、ニュースに関心が低い学生が複数名いることが判明し、毎週の課題として学生に与えることとなった。
- 3) O'Malley et al. (1985) による学習者ストラテジーには、'*metacognitive strategies*' と '*cognitive strategies*' がある。
- 4) Milen (1981) は、語学学習者の発表能力 (productive ability) と受容能力 (receptive ability) の相違を明示した。

参考文献

- Arnold, J. 2004. *Affect in Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press
- Johnson, K. and Morrow, K. 1981. *Communication in the Classroom*. London: Longman Group Ltd.,
- Krashen, S. 1985. *The Input Hypothesis*. London: Longman
- Lagutke, M. and Thomas, M. 1991 *Process and experience in the language classroom*. New York: Longman
- Lee, J. F. and VanPatten, B. 1995. *Making communicative language teaching happen*. New York: McGraw-Hill, Inc.
- Milen, J. 1981. *Communication in the Classroom*. Edited by Johnson and Morrow
- Nunan, N. 1988. *The learner-centered curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press
- O'Malley, J. et. al. 1985. Learning strategy application with students of English as a second language. *TESOL Quarterly* 19. pp557-584

- Oxford, R. L. 1990. *Language learning strategies: What every teacher should know*. Boston: Heinle & Heinle
- Oxford, R. L. and Crookall, D. 1989. Research on language learning strategies: Methods, findings and instructional issues. *Modern Language Journal*, 73, pp404-419.
- Rendo, M. J. 1995. Learner Autonomy and Cooperative Learning. *Forum-English Teaching* Vol. 33 No 4, pp41-43
- Smith, C. A. 2003 "Why we should read more than one daily newspaper" – the development of critical thinking skills –
日本時事英語学会第97回関西支部研究会

the first two years of life. The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.

The first year of life is characterized by rapid growth and development, and the second year by continued growth and the beginning of walking and talking.